

〈読み進むのが惜しい〉

## 本屋の本ネ

『民主』と『愛国』  
(小熊英二・新曜社)を読み始めた。一九九八年刊の『日本人』の境界』が、七九〇ヅ、五八〇〇円という価格であるにもかかわらず全国で二万部以上売れているという著者の、期待の新刊だ。私の勤務する店でも、発売直後に仕入れた七冊があつという間に売り切れ、九六六ヅ・六三〇〇円という大部であるにも関わらずである。

やっと一〇〇ヅまで読んでいるが、抜群に面白い。先に進むのが楽しみでもあり、もったいない気もするという意味では、たとえば適切でないことを承知で言つと京極夏彦の『妖怪シリーズ』に匹敵する。本屋をしてつくづく、お客様にそこの「公」を論じた薄っぺらい漫画みたいな本にお金を使っていただくのがもったいない、という気にさせる一冊。お薦めします。

(茅住ヤヒロ)